

昭和時代貨幣のデザイン

阿 達 義 雄

On the Designs of Coins in The Showa Era

by

Yoshio Adachi

I 序 説

貨幣のデザインは、毎日見ていると、その変化や推移に気がつかないが、10年20年という歳月を一期として観察してみると、予想外の変貌が見られる。

特に、その間に長期にわたる戦争、社会情勢の変動等のあった場合には、それ等の貨幣の金属材料に改変のあることは勿論のこと、貨幣面のデザインにも異なった傾向が認められる。

私は昭和時代発行の貨幣を、戦前戦時期と戦後期との二期に分けて、それ等のデザインの変遷を眺めてみたいと思う。ただ、この場合、硬貨の外に紙幣も一応考えられるが、紙幣は小さな円内に図柄を纏める硬貨とは違い、絵画的の自由さを持っているので、紙幣のデザインは参考の程度に止めて、貨幣すなわち硬貨の意味で筆を進めてみることにする。

それにしても、本稿の目的は、貨幣の文化史的考察であり、美術的研究を主とするものではないので、個々の貨幣の表現形式よりも、先ず、それ等のデザインを構成している全素材を要素に分析し、それ等の要素を総合的に眺め、その時代的意義や文化史的意味を考究する手がかりとしたいと思う。

要するに、貨幣のデザインの中に、何を採りあげているか、それを何のために特に採りあげたか、また、そこに採りあげられた事象に如何なる意味が含まれていたかということになるであろう。

昭和年代に入って通用されていても、その種の貨幣が、既に明治或いは大正時代から継続発行されていたものは別として、昭和初年から終戦迄の間に発行された多くの貨幣のデザインも、それ等を構成している要素(素材)から見ると、(1)菊花紋 (2)桐紋 (3)桜 (4)波 (5)瑞雲 (6)八稜鏡 (7)金鶏 (8)八咫鳥 (9)唐草 (10)勾玉 (11)旭日 (12)富士の12であり、これ等の諸要素の各様の組み合わせによって幾多のデザインが出来ていた。

それで、これ等の要素が、どのような貨幣に、どのような状態で採り入れられていたかということが問題になる。

なお、これ等戦前戦時の貨幣には、ニッケル貨・銅貨・アルミ銅貨・アルミ貨・錫貨などがあり、昭和期に入ってから初発の貨幣には金貨銀貨はなかった。また、昭和初期には5銭白銅貨・10銭白銅貨も使われていたが、これ等は大正9年から引続いて出されていたものであって、初発の貨幣ではない。「向鳳凰」50銭銀貨も昭和13年迄発行されていたが、この50銭銀貨は大正11年からの継続発行であって、このデザインは昭和初期の好尚からかなり遠いように思われる。

また、昭和初頭から終戦迄の間に発行された貨幣の銘価は1銭・5銭・10銭の小額貨幣であ

って、この期に初めて出された50銭以上の通貨は紙幣であり、その他、昭和19年には楠木正成5銭札、八紘一宇10銭札も発行されていた。

Ⅱ 戦前戦時の貨幣デザインの構成要素

(1) 菊花紋

昭和期の戦前・戦時中に発行された貨幣には、どの貨幣にも菊花紋が見られた。したがって、次に列記した貨幣は戦前戦時中に発行された総べてであり、これらのどの貨幣にも菊花紋が、その貨幣のデザインの中の素材として取り入れられていた。(◎印は有孔銭、括弧内の数字は発行年度又は発行期間である。)

- | | | |
|-------------------|--------------------|-------------------|
| ◎ 10銭ニッケル貨(8~12) | ◎ 5銭ニッケル貨(8~12) | |
| ◎ 10銭アルミ銅貨(13~15) | ◎ 5銭アルミ銅貨(13~15) | |
| ○ カラス1銭銅貨(13) | ○ カラス1銭アルミ貨(13~15) | |
| ○ 菊10銭アルミ貨(15~18) | ◎ 5銭アルミ貨(15~18) | ○ 富士1銭アルミ貨(16~18) |
| ◎ 10銭錫貨(19) | ◎ 5銭錫貨(19) | ○ 1銭錫貨(19・20) |

この菊花紋について特記すべきことは、

- (1) 昭和当初から終戦時迄に発行された1銭・5銭・10銭のすべての貨幣(硬貨)に菊花紋が見られる。
- (2) これ等の菊花紋は、みな貨幣の表(おもて)の上部又は中央に見られる。

なお、昭和20年に製造したものの、終戦となったために実際には発行されなかった陶貨について調べてみると、10銭陶貨・5銭陶貨の表には菊花紋が認められるが、1銭陶貨には之を見出せない。

(2) 桐紋

桐紋の見えるのは、今期の12種の貨幣中の次の7種である。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ◎ 10銭ニッケル貨(8~12) | ◎ 5銭アルミ銅貨(13~15) |
| ◎ 10銭アルミ銅貨(13~15) | ○ カラス1銭銅貨(13) |
| ○ カラス1銭アルミ貨(13~15) | ○ 菊10銭アルミ貨(15~18) |
| ◎ 10銭錫貨(19) | |

この桐紋については、三つのケースがある。

- (1) 10銭ニッケル貨、5銭アルミ銅貨、カラス1銭の銅貨とアルミ貨のそれぞれは、その表の上部の菊花紋に対し、<下部の桐紋>として配されている。
- (2) 10銭アルミ銅貨の場合には、その裏の円孔の中心に据えられた桜花の左右に<小さな対の桐紋>としてあしらわれている。(図4参照)
- (3) 菊10銭アルミ貨の表には、中央の大きな菊花紋の下に見られる桐紋となっているが、この桐紋の左右の葉は、細く左右に長く伸ばされて、菊花紋を下から囲むような図柄になっている。これは装飾用の<桐紋崩し>とも言われるであろう。(図1参照)

また、昭和19年に発行された10銭錫貨にあっては、円孔の上の菊花紋に対し、円孔の下部の桐紋となっているが、この桐紋の背後の左右に瑞雲が見られ、この瑞雲は、一見、前記の<桐紋崩し>のように左右両端で円孔を下から囲むような恰好になっている。(図1の下参照)



この期において、桐紋が(2)(3)のケースのように、それ自体としてよりも、他のために、その装飾をするという傾向を示していることに注意される。

(3) 桜 花

桜花は、デザインの素材としては、明治期には点の代りとしての〈点桜〉、大正期には、やや昇格させられて〈対の小桜〉として用いられたに過ぎなかった。それも、用いられる場所は、必ず貨幣の裏に限られていた。

戦前戦時の貨幣の中に桜花の見られるのは次の7種であるが、この他に未発行の陶貨にも見られる。

- ◎ 10銭ニッケル貨(8~12) ◎ 5銭ニッケル貨(8~12)
- ◎ 10銭アルミ銅貨(13~15) ◎ 5銭アルミ銅貨(13~15)
- カラス1銭銅貨(13) ○ カラス1銭アルミ貨(13~15) ○ 菊10銭アルミ貨(15~18)

(1) 貨幣デザインの素材としての桜は、昭和期の戦前戦時の貨幣の表面に用いられることなく、常にその裏面に限られていた。これは明治大正期の慣例の延長とも考えられる。菊花紋が天皇又は皇室の象徴と考えられていたように、貨幣デザインの桜花に対して、当局者が漠然と〈民草〉〈蒼生〉〈万民〉の象徴として、極めて

軽く考えていた意識の貨幣的表現が点桜や対の小桜であったと思われる。従って、デザインにしても、貨幣の表裏だけではなく、その桜花の大きさの如何、その位置などによっても、当局者の国民に対する深層心理や、その推移が窺われると考えるものである。

(2) やがて軍需資材にされることが予想されていた5銭ニッケル貨、10銭ニッケル貨のデザインは、いずれも満州事変後に国民の間から公募されたものであったから、軍国主義的色彩の濃厚なものが見られたが、当局者は露骨な軍国主義的なデザインを避けようとしていた。

その頃は、未だ桜を貨幣の中にまで大きく取り入れて、軍国意識を高調しようとは考えていなかったようである。

昭和8年から12年発行の10銭ニッケル貨、5

図2 [点 桜]



明治時代の旭桜型銀貨

図3

五銭ニッケル貨



〔対の小桜〕

カラス一銭貨



銭ニッケル貨、昭和13年から15年発行のカラス1銭アルミ貨やカラス1銭銅貨(13)における桜もその貨幣の裏の〈左右の対の小桜〉として用いられていた。

また、10銭ニッケル貨の裏の地紋の青海波などは、後の〈逆巻く波浪〉などに比すると、繊細な曲線で描かれた小波であって、東洋平和のシンボルと言ってもよいような海波であった。すなわち、昭和8年の頃は、我が国には未だそれだけの余裕があった。

(3) これ等に対し、特に注目すべきは、昭和13年発行の10銭と5銭のアルミ銅貨に見られる桜であろう。この二貨の発行された昭和13年4月1日には、国家総動員法が公布され、それと共に臨時通貨法に従って、

小額政府紙幣や小額貨幣を発行し、愈々今迄のニッケル貨を回収し始めた年であり、前記10銭、5銭のアルミ銅貨のデザインも公募作品の中から選ばれたものであった。

貨幣デザインの素材としての桜が<対の小桜>から脱して、目立つような場所に、目立つような大きさで登場したのは、これが最初であった。ただ、このアルミ銅貨は<穴あき銭>であったから、中央に円孔があるので、デザインとしては、この難点の克服が要請された。

図4

5 銭アルミ銅貨



〔片割れ桜〕

10銭アルミ銅貨



〔芯なし桜〕

桜は、この難点を克服することによって漸く小桜の地位を脱してクローズアップされた観がある。

すなわち、10銭貨の方は、約4.5ミリの円孔を花芯と見做すことによって、八重桜を貨幣の中心に大きく据えたのであった。之に反し、5銭貨の方では、邪魔になっている約4ミリの円孔を巧みに回避し、円孔を挟んで右と左に片割れ桜を配置し、それぞれ貨幣の両端の<へり>の外に、花の半分が描れているかのように見せた。

これは、一輪の花を二分して、花芯を銭の縁(へり)に持って行くことによって、二つの花と見せる手法である。菊花紋や桐紋の場合は、之を二分したり、真ん中に円孔を穿つようなことは、その時代としては許されなかったであろう。

桜の場合は、公募に応じた国民の智恵によって之を敢行した。その代り、5銭貨の表には桐の紋を桜よりも小さく円孔の上と下に配し、10銭貨では、今迄の<対の小桜>に代って、今度は桐紋が<対の小桐紋>となって、桜の左右の両端にその身を小さくして片寄せられることになった。

桜は、貨幣の裏ではあるが、この頃に、このようにして漸く自己の存在を闡明するようになった。

- (4) 桜花が、更に一步進んで、貨幣の裏にせよ、菊花紋と同じ大きさで、貨幣の中央に据えられるようになったのは、わが国が国際的環境において極度の窮地に立ち、愈々米英との開戦する決意を迫られた昭和15年発行の菊10銭アルミ貨においてであった。

この10銭アルミ貨は、その表中央に大きく菊花紋が据えられてあるので、菊10銭アルミ貨と呼ばれているものの、裏の桜花の大きさは表の菊花紋と殆んど等しくなっている。したがって、菊桜10銭アルミ貨とも言われよう。これは、紋章的な桜である。

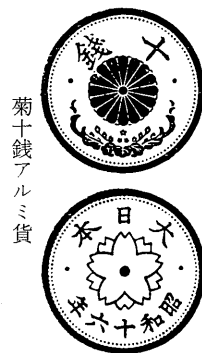
- (5) 昭和20年発行の予定で造られたが、終戦のため未発行に終わった10銭・5銭・1銭の陶貨のうち、1銭陶貨の裏(表には富士)の中央に簡単な図案的な桜が見られ、5銭陶貨の表面の地模様も桜であった。特に、この1銭陶貨には菊花紋や記年(発行年記)のない点に注意したいと思う。

(4) 波

昭和貨幣面に見られる<波>は、平和的な<青海波>と闘争的な<激浪>との二つに分けて考えられる。

- ◎ 10銭ニッケル貨(8~12) — 青海波 —
- ◎ 10銭アルミ銅貨(13~15) — 激浪 —
- カラス1銭銅貨(13) — 八稜鏡外周激浪 —

図5



菊十銭アルミ貨

〔紋桜〕

○ カラス1銭アルミ貨(13~15) 一八稜鏡外周激浪一

上掲の各貨幣のデザインは、いずれも公募の結果採択されたものである。したがって、これ等には当局の意向とともに国民の意識が反映しているものと思われる。

昭和8年発行の10銭ニッケル貨の裏は、貨幣面を縦に三分して、左右の半月形の部分に静かな波を描いたもので、『原色日本のコイン』には、「四海波静かな島国をあらわした青海波の地紋がとりいれられている。」と記されている。

三本の細い曲線から成る多くの小波は確かに平和そのもので、恐らく、その頃の国民一般の願望を象徴していたものであろう。〈青海波〉は、この10銭ニッケル貨の前に出された10銭白銅貨(大正9~昭和7)にも既に見られたものであるが、この白銅貨の〈青海波〉の一つずつの小波を描いた曲線は、ニッケル貨の小波のそれよりも遙かに繊細で、肉眼で辛うじて見ることでできるようなものであった。すなわち、私等は之によって、大正期における平和に対するイメージと満州事変以後のイメージとの差を、貨幣面の〈青海波〉の描法の推移によって知ることができる。

また、10銭ニッケル貨を回収して、その代りに発行された10銭アルミ銅貨(13~15)の表に見られる〈旭日下に逆巻く激浪〉のデザインによって、もう〈青海波〉どころではなかった昭和13年頃の日本の情勢が想起される。

昭和13年の4月には国家総動員法公布、7月には張鼓峰で日ソ両軍衝突、10月には日本軍広東占領、武漢三鎮占領となったが、当時、「武漢落ちて道遠し」と歌われたように、我が国も、もう抜きさしならぬ泥沼に足を突っ込んでしまった感があった。

したがって、昭和13年に桐1銭銅貨(量目3.75g)の品位(銅950, 錫40, 亜鉛10)が落とされて銅900, 亜鉛100, とされ、量目だけは元のまま3.75gで押して行こうとしたものの、その年の内に今度は0.9gのアルミニウムのカラス1銭アルミ貨が慌てて出され——しかも、この新1銭はデザインを考慮する暇もなく、カラス1銭銅貨のデザインをその儘縮小して流用するなど、急迫した情勢は、これらの1銭貨の表の〈八稜鏡の外周怒濤〉がよく之を表現しており、八稜鏡内は国内、外周怒濤は海外情勢と解することができよう。すなわち、当時の内外の情勢を考えた場合、このデザインを取って変更する必要もなかったとされたであろう。

〈八稜鏡外周波浪〉のデザインは、大正期の10銭白銅貨(大正9~昭和7)にも既に見られたものであったが、大正期の波浪が〈青海波〉——平和そのものの〈青海波〉であったことは既に述べたところである。

これに反し、昭和13年発行のカラス1銭銅貨や、カラス1銭アルミ貨の波浪は、荒浪であり怒濤であって、これ等は日本に対する当時の国際的世論の悪化や前途の多難なことを象徴的に表現したものとして領かれよう。

要するに、貨幣デザイン素材としての波浪は、大正期から発して系列的に展開の姿が見られるものであって、その軌跡を辿ってみると、大正9年10銭白銅貨(八稜鏡外周における繊細な小波)→昭和8年10銭ニッケル貨(貨幣左右両端の弓形の中に見られる三本の曲線で示された少々荒い小波、この中に〈対の小桜〉が点じられている。)→昭和13年10銭アルミ銅貨(旭光下の荒浪)→昭和13年・カラス1銭銅貨・カラス1銭アルミ貨(八稜鏡の全周を

図6

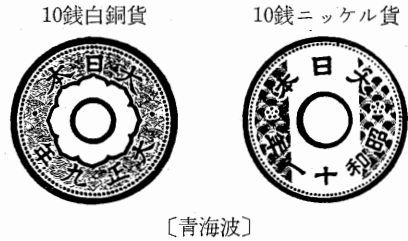


図7 〔波浪〕



カラス1銭銅貨

怒濤が取り囲んでいる。)となる。

なお、参考迄に、この波浪が終戦後にどう変っているかと調べてみるに、終戦後は波浪という波浪は貨幣には全く見られず、ただ、昭和24年に発行され、そのデザインが今も踏襲されている5円黄銅貨の表に、小波さえも立っていない<田圃の静水>として表現されており、此处には一本の稲穂が頭を垂れているだけである。

(5) 旭光・富士霞・瑞雲

昭和13年発行の10銭アルミ銅貨の上半部に線の太い<旭光>が見られる。これは旭日の系統をひくものであろうが、荒浪を背景として、朝日の昇る勢を象徴したものである。

次に、昭和16年に至って、1銭アルミ貨の表に富士山が描かれるようになった。昭和13年発行の政府紙幣50銭にも富士が見られたが、コインに富士山が登場してきたのは、これが最初である。

ただ、これが量目僅か0.65グラムという今迄にない微小な貨幣の面に古来から日本の誇りとされてきた富士山が引き出されたという事実の裏には、何か悲壯的なムードが漂っていた。

しかも、この富士1銭アルミ貨は、わが国が米英に宣戦布告の年に発行され、18年2月、日本軍がガダルカナル島撤退、4月、山本五十六連合艦隊司令長官が南太平洋前線で戦死を遂げた——戦況が愈々不利になった年に0.65gから0.55gに量目を減らされ、やがて、その発行が停止されている。

アルミが航空機の資材として重要なことは、周知のことであったから、貨幣のデザインの中に富士が持ち出されたことは、——特に1銭貨の中に用いられ、<水にも浮く>ような軽さにされたことは、反って、国民に不安の念を抱かせた。

〔旭 光〕◎10銭アルミ銅貨(13~15)……旭光を背景にした荒浪。(表)

〔富士霞〕○1銭アルミ貨(16~18)……極めて簡単な富士山、下に霞も見える。(表)

〔瑞 雲〕○5銭アルミ貨(15~18)……中央の菊花紋のうしろに瑞雲がたなびいている。(表)

◎10銭錫貨 (19)……円孔の下の桐紋のうしろの方に、円孔の下部を囲むように瑞雲がたなびいている。(表)……図1の下

◎5銭錫貨 (19)……「10銭錫貨」と同じ。

貨幣の表に<瑞雲>の現われてくるのは、昭和15年の5銭アルミ貨で、これは中央菊花紋の後に左右にたなびいているもので、今迄とは異なった感じを抱かせるものがあった。(図9参照)

これが昭和19年の5銭、10銭の錫貨(図1)になると、円孔の下の桐紋の両翼が伸びているようにも見受けられ、これが一般に瑞雲として受け取られたか否かは甚だ疑問であり、この錫・亜鉛合金の灰白色(使用しているうちに黒灰色となる。)と、この年に行なわれた大都市の学童の集団疎開、サイパンにおける我が軍の玉砕、米機B29の各都市の大空襲が国民に呼び起こした半ば絶望感と相通うものがあったように思い出される。

したがって、この貨幣の瑞雲は、政府、国民おしなべて何か奇蹟の出現を祈る心持の現われであったと考えられる。

(6) 八稜鏡・勾玉・金鶏・八咫鳥

<八稜鏡>は鏡としてではなく、昭和13年度発行のカラス1銭(銅貨もアルミ貨もデザインは同じ)の2貨の表の銘価「一銭」の囲み(八稜鏡の形)となって用いられているものであり、昭和

図8



1銭アルミ貨

〔富士霞〕

図9

5銭アルミ貨



〔瑞雲〕

8年度発行のニッケル貨の裏にも、8個の勾玉として、円孔を囲んで八稜鏡らしいものを形成していた。

また、このニッケル貨の表の円孔の下には、羽根を上げた金鶏が見られ、昭和15年度発行の5銭アルミ貨の裏にも、このような金鶏が据えられていた。雲間の八咫鳥は、昭和13年度に発行された同じデザインの1銭銅貨と1銭アルミ貨に見られるものであって、デザインとしては別のものではないが、貨幣の種類としては異なっている。

〔八稜鏡〕

○ カラス1銭銅貨 ○ カラス1銭アルミ貨 ◎ 5銭ニッケル貨

〔勾玉〕

◎ 5銭ニッケル貨

〔金鶏〕

◎ 5銭ニッケル貨 ○ 5銭アルミ貨

〔八咫鳥〕

○ カラス1銭銅貨 ○ カラス1銭アルミ貨

図10



〔金鶏と勾玉〕

以上の貨幣のデザインの素材は、重複しているものもあるので、一括して表示すると次のようになる。

貨幣の種類	発行年度	八稜鏡	勾玉	金鶏	八咫鳥
5銭ニッケル貨	昭和8～12	○	○	○	
カラス1銭銅貨	昭和13	○			○
カラス1銭アルミ貨	昭和13～15	○			○
5銭アルミ貨	昭和15～18			○	

これ等の貨幣デザインの素材は、之を一括するなら<神代物>とも言われよう。そして、之を帰納的に考えてみると、みな戦時又は戦争勃発を予期していた時に用いられていた。例えば、昭和8年発行のニッケル5銭貨などは(ニッケル10銭貨と共に)、そのニッケルは、やがて重要な軍用資材と転化するべく運命づけられていたので、神代物の八稜鏡・勾玉・金鶏を併有しており、カラス1銭貨も八稜鏡と八咫鳥を併有していた。

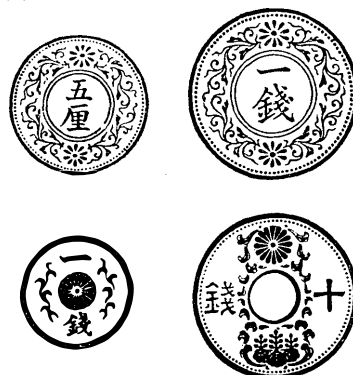
5銭アルミ貨だけは金鶏だけのように思われようが、この5銭アルミ貨の表にも<瑞雲>のあったことは既に述べた処であり、考え方によれば瑞雲も、その超越的な力の点から神代物とされるであろう。

要するに、神代物には神秘的な力が信じられ、祈念の対象となり易いので、準戦時又は戦時の貨幣のデザインの素材として選ばれたのであろう。

(7) 唐 草

唐草は大正5年発行の1銭銅貨、5厘銅貨の表では、内円に包まれた<一銭>や<五厘>の銘価を外廓から囲み、穏和な装飾的役割を果たしていた。

図11



〔唐草〕

また、昭和8年発行の10銭ニッケル貨の表では、円孔の上の菊花紋と円孔の下の桐紋とを、唐草の長方形で囲んで縦模様を形造り、菊花紋桐紋の飾りとなっており、19年発行の1銭錫貨にあっては、その表の菊花紋の左右にあって、菊花紋の飾ともなっているものであるが、1銭錫貨は直径15ミリという微小さゆえ、この唐草は唐草の断片に過ぎなかった。

以上のように唐草や唐草模様が準戦時、戦時中の貨幣のデザインの中で影が薄いのは、これが何となく平時的な素材であって、戦時にふさわしいエネルギッシュな或いは呪文的な感じに欠けていたからであろう。然う考えてみると、満州事変前後からわが国の貨幣のデザインの素材にいかん 呪文的(神代的)な感じなものが多くなってきたかということに気がつくのである。

Ⅲ 昭和後期の貨幣デザインの素材 (一)

(a) 植物(菊・桐・桜・唐草・稲)

昭和時代を貨幣史的に考察する場合、太平洋戦争の終わった昭和20年8月15日を界点として、戦前戦時期と戦後期とに分けることも便利であるが、終戦の時から既に30年も経過しているに拘らず、これを一様に戦後期と一括するのは語感・実情の上から無理があるように思われる。

これらのことを考えて、昭和20年8月15日以前を昭和前期とし、それより今日迄を昭和後期とし、昭和後期を更に何らかの基準によって分けるならば、如上の無理を緩和することができそうである。

昭和後期にあって、貨幣史・物価史の観点から最も重要視すべき時点は、50銭以下のすべての貨幣を廃貨とし、貨幣の最低単位を1円とした昭和28年12月31日である。また、この頃には、戦後のインフレーションも止み、物価も大体に安定してきた時であった。

従って昭和の戦後期も、この昭和28年で終ったと考えることもできよう。

ただ、昭和貨幣に現われたデザインの素材については、前に戦前戦時を一時期と考えたので、これと比較対照の上から、終戦の時点から現在迄を昭和後期として一括処理することにするが、大雑把な言い方をすれば、要するに之は戦後とも言われるのであろう。

前章に、昭和前期、すなわち、戦前・戦時の貨幣のデザインの素材として採られているものの類別や、それ等の傾向、或はそれらの意義について概観してみたのであるが、本章ではそれ等を部門別に一括しながら、昭和後期の貨幣のデザインの素材と比較対照して私見を述べてみることにする。

なお、次の「表」の中に示した頻度は、それぞれの貨幣に現われてくるデザインの中の物象(素材)を、その貨幣の表裏にかかわらず1回としたものである。すなわち、或る貨幣の表にも裏にも<桜花>が見られる場合には2回となるが、或る貨幣の表(又は裏)に<対の小桜>が見られても之は1回である。

時 期 \ 植 物	菊 花 紋	菊 花	桐 紋	桜 花	唐 草	稲
昭 和 前 期 (昭和1~20)	12	0	7	7	2	0
昭 和 後 期 (昭和20~50)	4	3	1	7	3	4

◎ 上記の外に、昭和後期(昭和20年8月16日以降)の貨幣に1回だけ出てくる植物関係のものには、○梅花
○橘 ○月桂樹 ○麦 ○若木 ○双葉 がある。したがって、昭和後期の貨幣に現われてくる植物の種類は、菊花紋を菊花の中に入れて数えると11である。

また、「若木」「双葉」の樹名は不明である。

この表を見て知られることは、戦前・戦時、すなわち昭和前期に植物が4種類に過ぎなかったのに対し、昭和後期では11種になっており、従来慣例的に踏襲してきた伝統を破って新しいものを採ろうとする傾向は見られるものの、植物に関する限り、古典的揺曳が著しく、全く目新しいというものは見られない。

一言でいうならば、教訓と結びつくようなものが選ばれ、中年以上の者の思惑を気にしてか、幼年者・青少年の馴染んでいる、美的情操的なフレッシュな草花などは黙殺されていた。

今迄、貨幣における植物関係のデザインの素材は、菊・桐・桜に集中して多かったが、戦後になってからは、これ等の出現回数が少なくなり、新顔として目立ってきたのは稲であり、唐草の3回は之に次ぎ、その他の植物の出現は、いずれも唯1回に限られている。

桜花の出現は昭和前期と同様に7回であって、この中の3回は記念貨幣で、それ等の記念貨幣を見るならば、東京オリンピック記念の1000円銀貨や万国博覧会記念の100円白銅貨にも桜花が採られ、殊に1000円銀貨には、その表裏にそれぞれ採られているので、これ等を加算すると、昭和前期と同様に7回となるのである。

(1) 菊花紋・菊花

菊花紋の見える貨幣を調べてみると、

- 稲10銭アルミ貨 (20~21) ー日本政府ー
- 鳩5銭錫貨 (20~21) ー日本政府ー
- 大型50銭黄銅貨 (21) ー日本政府ー
- 小型50銭黄銅貨 (22~23) ー日本国ー

菊花紋の所在は、みなこれ等の貨幣の表の上部にあり、その下に稲穂・鳩・鳳凰・六連桜などが見られ、裏を見ると、発行主体は<大日本>ではなく、<日本政府>と記され、小型50銭黄銅貨には<日本国>という文字が見られる。また、鳩5銭錫貨の裏の左右には<対の桐小紋>が見え、桐紋の現われてくるのは、これが最後である。

これ等四貨幣の材料がアルミニウム・錫・黄銅となっているのは、終戦直後のこととて、主として軍需資材のスクラップを利用しなければならなかった当時の状況を語っている。

なお、菊花紋でない<菊の花>のある貨幣は、

- 旧50円ニッケル貨 (30~33)
- 新50円ニッケル貨 (34~41)
- 50円白銅貨 (42~)

ここで、改めて特記したいことは、昭和22年発行の小型50銭黄銅貨を最後として、明治以来、殆んどどの貨幣にも見られた<菊の御紋>が消えてしまっていることである。

これは、昭和22年7月、通貨の図案に関する懇談会で連合軍総司令部より「今後は菊の御紋章の使用を禁止する」との発言に従ったもので、その後発行された貨幣には、菊花紋も菊花も現われてこなかった。〔注1〕

銭単位の貨幣が廃貨にされたのは、昭和28年7月の「小額通貨整理法」によるものであるが、その後1円・

5円・10円の日銀券だけでは不便となり、それに加えて、戦後インフレのため特に必要が感じられてきた50円の日銀券も不足していたので、之を補うために1円貨幣と50円貨幣を製造すること

図12



〔菊〕

になった。

この時、上述の両貨幣の図案が公募され、その中から採用されたのが1円貨の若木と50円貨の菊一輪であった。50円貨のデザインは横から見た大輪の菊一輪で、之が表にされた。

これは、紋やシンボルマーク的なものではなく、写実的な菊の花であった。ただ、この50円ニッケル貨が出廻るようになると、その頃出ていた鳳凰百円銀貨と大きさも色も似ていたため、紛らわしいという批議もあったので、百円貨と区別し易いようにギザを除き、〈穴あき銭〉に改めることになった。それで、再び図案を公募した結果、貨幣の円孔を菊の花の中心にしたデザインを採択し、昭和34年に、新50円ニッケル貨が発行されるようになった。

その後、写真感光材料・歯科材料・金属との溶接材料としての銀の需要が高まり、銀の不足が世界的現象となってきたため、稲百円銀貨(34~41)を白銅貨に改めることになったので、その銘価の関係から新50円ニッケル貨も白銅貨にされることになった。

その時、デザインも改められ、この50円白銅貨の表が菊花にされた。すなわち、今の50円白銅貨のデザインは、円孔の左に二輪の菊花、右に一輪の菊花が見られる。今度は大輪の菊ではなく小菊である。このデザインが公募のものか否かは明らかでない。

要するに、菊花紋は22年発行の小型50銭黄銅貨のデザインを最後として貨幣面から消えてしまったものの、昭和30年以降の50円貨には、紋やマークではなく、写実的な生き生きとした自然の菊の花として見えて、今に至っているということである。

以上述べた菊花紋と菊花は、終戦の年に発行された10銭アルミ貨や5銭貨に見られる菊花紋は別として(昭和20年発行の昭和後期貨幣は右の2種だけ)、大型50銭黄銅貨(21)→小型50銭黄銅貨(22~23)→旧50円ニッケル貨(30~33)→新50円ニッケル貨(34~41)→50円白銅貨(42~)という工合に、銘価50(銭又は円)の系列をその舞台として連綿と咲き誇っている。

これは、当局又は国民の菊花紋に対する郷愁から発するものであろうか。それとも、春の国花桜に対し、今や秋の菊花も、事実上、第二の国花となっていることを語っているのであろうか。

(2) 桜 花

終戦以来の貨幣のデザインの素材としての桜花は、次の4貨に見られる。

- 稲10銭アルミ貨(20~21)……〔図15参照〕
- 小型50銭黄銅貨(22~23)
- 鳳凰100円銀貨(32~33)
- 桜100円白銅貨(42~)

稲10銭アルミ貨では、桜花は裏の銘価10の背後に地模様のように置かれており、小型50銭黄銅貨では、その表の銘価〈銭十五〉を右から半円状に囲むような図柄であり、その上部は菊花紋によって蔽われているが、いずれも銘価を引き立てる役を果たしていた。

鳳凰百円銀貨になると、表は鳳凰に譲って、裏においては、中央の日章を、桜の枝で八稜鏡を形成して囲み、その四つの稜角に満開の桜花、各稜辺には、それぞれ二つ宛の蒼をつけるという極めて技巧的で変ったデザインである。この枝状の桜は朝日に匂う桜花として、旭日の装飾的役割をつとめていたのであるが、中央の旭日が全体のヒトミとなって生彩を放っていた。

図13



小型
50銭
黄銅貨

鳳凰
百円
銀貨

桜百
円白
銅貨

〔桜花〕

百円白銅貨は桜百円とも言われているように、表に満開の三輪の桜花と四つばかりの蒼が見られるというデザインで、前述の百円銀貨の凝った技巧とは対照的に自然的無技巧の美しさを見せ、裏は銘価100と記年の外は何もないという気安さで、この百円白銅貨においては桜花の独り壇上である。

なお、全体的に気づいた点を挙げてみると、

- (1) 昭和後期の桜には、明治期・大正期のような〈点桜〉や〈対の小桜〉は見られない。
- (2) 戦前・戦時(昭和前期)中の桜がデザインの素材として用いられた場所は、貨幣の裏面に限られていたが、昭和後期には、全四貨幣の中で、裏に2回、表に2面、その姿を見せている。
- (3) 昭和20年代の稲10銭アルミ貨、小型50銭黄銅貨にあっては、桜は未だ脇役的存在であったが、32年、42年発行の百円貨になると、貨幣の表裏に拘らず、他に気兼ねなく思う存分にその美を発揮しようとしている。
- (4) 菊花が50円貨のデザインの素材として定着しようとしているに対し、桜は100円貨の方を定座にしようとする気配が感じられる。
- (5) 貨幣のデザインの素材としての桜は、明治期の微小な〈点桜〉に発し、大正期の〈対の小桜〉、戦時中の〈片割れ桜〉、〈芯なし桜〉、〈紋桜〉と、次第に、その存在を明らかにし、終戦直後には、貨幣の裏の地模様にも似た〈陰桜〉となって、ややその影が薄くなったが、やがて昭和21年の〈六連桜〉、32年の〈旭日八稜鏡枝桜〉、34年の〈写実浮彫桜〉というように、その生長発展の跡を辿ることのできるの、これが我が国民の自我意識の発達軌跡となっているからであろう。

こう考えてみると、桜は、わが国の国花であると共に、貨幣のデザインの素材としての桜は、日本国民の風姿や精神の象徴とも言われるであろう。

(3) 唐 草

唐草は絡み草で、ギリシャで唐草模様として完成されたものがペルシャ・インド・西域・中国を経て日本へ伝わったと言われ、この言葉は既に『宇津保物語』などにも見えている。

昭和8年の10銭ニッケル貨、昭和19年の1銭錫貨に唐草が見られる。だが、これ等を、大正5年の桐一銭銅貨や五厘銅貨の唐草模様と比較してみると、戦前・戦時中の唐草は、いかにも影の薄い存在であった。

では、これは貨幣において、終戦後どうなったかと検してみると、

- 大型50銭黄銅貨(21)…… 飛んでいる鳳凰の周辺の空間を埋めるものとして用いられている。(表)
- 5円黄銅貨(23~24)…… 国会議事堂を囲んでいる内円と、この黄銅貨の外廓との間の輪状の空間を埋めながら、全体の飾となっている。(表)
- 10円銅貨(26~)…… 宇治平等院鳳凰堂の上部の「日」「本」「国」、下部の「十」「円」などの文字を囲んで、それらの装飾模様となっている。(表)

上の5円黄銅貨の場合は、唐草が粗放ながら周辺の装飾となっているので顔かれるが、その他の50銭黄銅貨の鳳凰の周辺の空間や10円銅貨で、「日本国」や「十円」の文字に何故うさく

図14



大型50銭黄銅貨

5円黄銅貨

〔唐草〕

一々唐草を纏いつかせたのかというに、これは偽造防止のためであろう。

(4) 稲 ・ 麦

明治30年発行の稲5銭白銅貨、31年発行の稲1銭銅貨にも稲が見られた。だが、これ等の貨幣にあっては、稲束が<菊桐の花束>のように、貨面の中央に据えられた銘価を下から囲んで、その装飾的役割をも為していたのであった。

昭和20年以後、貨幣のデザインの素材として用いられていた稲には、終戦直後の廃墟のような国土に食を求めてさ迷う国民の飢餓を救うとか、食糧問題の対策とか、或は敗戦の結果、今後は農業立国を全国民の悲願にするとかいう祈がこめられていた。

したがって、描かれていた稲は明治貨幣に見られる装飾的な稲束などとは違って、みな貨面の中央に枝もたわわに穂っている稲穂であった。

- 稲10銭アルミ貨 (20~21)
- 大型50銭黄銅貨 (21)
- 5円黄銅貨 (24~)
- 稲100円銀貨 (34~41)

すなわち、稲10銭アルミ貨の表には、穂った稲穂が右から左の方へ垂れており、5円黄銅貨の表には水田から伸びた稲穂が、左の方から円孔の上を曲って、右の方に重そうに垂れている。

稲100円銀貨の表の稲などに至っては、豊熟のあまり夥しい実が見え、そのために枝も葉も隠れて見えない程である。

戦時中は絶えず食糧増産が叫び続けられていた。然るに、その頃絶えて貨幣に稲が見られず、戦後慌しく稲を持ち出したのは、当局としては、今や兵器を捨てて、鋤を執ることを中外に表明する必要もあったであろうし、戦後二~三年の間の国民はインフレのため右往左往し、来る日も来る日も食糧の獲得のため追われていた実情の反映でもあったであろう。

軍国主義的デザインの戦時中の貨幣とは全く趣を変え、産業立国を強調した貨幣は、昭和21年発行の大型50銭黄銅貨であった。

この黄銅貨の裏を見ると、中央には稲・麦の穂が示され、それに寄せかけて鋤、ツルハシがあり、稲麦のうしろから歯車が隠見し、その左右に魚が一疋宛あしらわれているという、実に盛沢山なデザインであって、これは国土再興が如何に急を要していたか、物資、食糧が如何に窮乏のどん底にあったかということを実に語るものであろう。

何よりも先ず想起すべきことは、当時、貨幣を製造するにも適当な資材がなく、戦時中、軍隊で用いられた砲弾の葉莖や弾帯などのスクラップの払下げを受けて、この黄銅貨を造ったということであろう。

また、この年の5月19日には“食糧メーデー”が行なわれ、21日は800人の群集が皇居前に集まり、天皇の食事内容の公開を迫ったことや、この日の「米よこせ大会」で六万人の群集が集ったこと、すなわち、このような背景や雰囲気の中から生まれたデザインが、この大型50銭黄銅貨のデザインであったと考えてもよいであろう。

さらに、この昭和21年は、終戦後の物価騰貴が昂進し、大インフレーションに突入した年であった。

図15 大型50銭黄銅貨 稲十銭アルミ貨



稲100円銀貨 [稲] 5円黄銅貨

これを明らかにするため、昭和9年から11年迄の物価を100として示した日本銀行新指数によって、この年の前後の卸売物価指数を引用してみると次のようである。

物 価 指 数	昭和19年	231.9
	昭和20年	350.3
	昭和21年	1,627.1
	昭和22年	4,815.2
	昭和23年	12,792.6

これでは、21年の物価は、20年の時の4.5倍以上である。

物を造るよりも、ただ、物を移動させていた方が儲かるというので、生産も殆んどストップの状態です。第一、この間に、この大型50銭黄銅貨も材料の値段の方が銘価の50銭よりもずっと高くなり、せっかく造った

22年発行準備中の大型黄銅貨も鑄潰して、今迄の4.5gを2.8gに減じて発行したのが小型50銭黄銅貨であった。

だが、インフレの勢は更に甚だしくなり、この小型50銭黄銅貨も23年限り、その発行を停止しなければならなくなった。これによっても、如何にこのインフレが猛威を逞しくしたかが知られよう。

(5) 昭和後期の貨幣に初めて現われた植物

戦前・戦時——昭和前期の貨幣のデザインの中の素材で、戦後にも現われてきた菊・桐・桜・唐草・稲については前に述べたが、戦後初めて現われてきた植物関係の素材としては、梅花・月桂樹・橘・麦・双葉・若木などがある。

これ等の現われてくるのは次の貨幣である。

- 大型50銭黄銅貨(21) ……この貨幣の裏に、麦が稲その他の器材と共に見られることは既説。
- 一円黄銅貨(23~25) ……この貨幣の表に記された「一円」という銘価を、橘の実をつけた枝がU字状に下から囲んでいる。
- 無孔5円黄銅貨(23~24) ……裏の中央の内円の中に鳩が据えられ、その地模様には梅の花が見られる。
- ◎ 有孔5円黄銅貨(24~) ……裏の円孔の左右に小さな双葉が見られる。何の双葉かは不明。
- 10円銅貨(26~) ……裏に記された銘価10と、その下にある記年をU字状に束ねた月桂樹が囲んでいる。
- 一円アルミ貨(30~) ……表中央に何かの闊葉樹の苗木が見える。之を「若木」と言う者もある。

以上6種の植物は、新しく出現したものとして注目される。尤も〈双葉〉と〈苗木〉の樹名は全く不明であるが、これは当初から意識的に樹名を限定して考えなかったものであろう。

すなわち、これは今後培養しなければならない国力の萌芽(双葉)や国土緑化(苗木)のシンボルとして用いられたものであろう。

貨幣の発行年代から考えてみると、橘や梅花は、戦争のため焦土となった我が国に、優れた平和文化を復興する願望が託されていたとも考えられる。

図16



〔植物〕

IV 昭和後期の貨幣デザインの素材 (二)

(b) 動物

昭和前期(戦前・戦時)の貨幣に現われていた動物は、鳥類の金鷄と八咫鳥だけで、鳥類とは言っても非現実的のものであった。これ等を昭和後期の貨幣に見られる動物と比較対照のために併せて記してみると次のようになる。

すなわち、昭和後期の貨幣に見られる動物は鳳凰・鳩・魚だけであって、もはや金鷄や八咫鳥の姿は見られない。

	昭和前期 (昭和1~20)	昭和後期 (昭和20~50)	昭和後期貨幣(発行年度)
魚	0	1	● 大型50銭黄銅貨 (21)
鳩	0	2	○ 鳩5銭錫貨 (20~21) ● 無孔5円黄銅貨 (23~24)
鳳 凰	0	2	○ 大型50銭黄銅貨 (21) ○ 鳳凰100円銀貨 (32~33)
八 咫 鳥	2	0	
金 鷄	2	0	

(注) 貨幣の冒頭につけた○印は、その貨幣の表を示し、●印はその貨幣の裏を示す。例えば「魚」の欄の昭和後期貨幣として、●大型50銭黄銅貨としてあるのは、その魚が大型50銭黄銅貨の裏に見られるということである。

【鳳凰】 鳳凰は明治貨幣には全く見られず、大正11年の50銭銀貨に登場したことがあったが、その後絶えて見なかったものである。然るに、終戦直後に発行された大型50銭黄銅貨や昭和32年に発行された百円銀貨になると、鳳凰が現われてくる。

大正11年の50銭銀貨の鳳凰は、大正4年の大正天皇御即位御大典を記念する意味をも込めて公募された貨幣の図案で、その後、銀価騰貴のため持ち越されて、大正11年にその図案に少し修正を施して発行したものであった。

したがって、この鳳凰には之を天皇に擬し、御盛典を祝ぎ、聖代を賀するムードが揺曳していた。

それでは、終戦直後に出された大型50銭黄銅貨の鳳凰は何を意味していたのであろうか。勿論、これは戦後の貨幣に現われてきた鳩などと共に平和の象徴として採られたのであろう。

この大型50銭黄銅貨の表面には、一見、さり気なく鳳凰が描かれ、舞っている姿態のようにも思われるが、治まった聖代に出現すると言われていた鳳凰を、終戦後の混乱時代に、突如として持ち出したので何となく不自然であった。尤も、50銭という銘価だけから考えるなら、大正11年に出された50銭銀貨の向鳳凰の後を襲うものとも見られよう。

この50銭黄銅貨の鳳凰の姿は、何か物に驚いて飛び立ったようにも感じられる。したがって、その身边を飾っているはずの唐草模様も、鳳凰から抜けた

図17



〔鳩と鳳凰〕

羽毛が飛散しているようにも思われる。

このように感じられるのも、この貨幣の裏面には既に「大日本」の文字がなく、わが国の貨幣のデザインとしては全く異数の稲・麦・歯車・鋏・ツルハシ・魚などから成る雑然たる構成との対照からであろうか。この大型50銭黄銅貨は、表裏いずれを見てもその頃の当局（又はデザイン作製者）の周章と困惑の心的態度が想見される。この点から云っても、この大型50銭黄銅貨は終戦直後の時代相を如実に反映している代表的貨幣であろう。

昭和32年発行の百円銀貨にも鳳凰が見られるが、この出現にはかなり譲られる節がある。

- (1) この銀貨は、終戦後初めて発行された銀貨であったばかりではなく、銀貨としては大正11年発行の向鳳凰50銭銀貨の後を承けたものである。また、もう金貨はない時代であったから、銀貨が最高の貨幣であった。したがって、鳥の王たる鳳凰に結びつけられたのであろう。
- (2) 昭和32年頃には、我が国民の経済生活も漸く安定してきたので、終戦直後の飢餓と虚脱の時代から見ると聖代の感があった。これは、『日本の百年』（筑摩書房）の「過去十年ブーム一覧表」などによっても譲られるであろう。〔注2〕
- (3) 百円銀貨の表の鳳凰は、唯一羽の鳳凰をその儘描いただけであるから、デザインに苦心しているとは考えられないが、裏面の旭日八稜鏡枝椏の奇抜な技を見ると、新銀貨のデザインだというので、創案者が如何に気負い立っていたかということが推察される。

【鳩】 鳩が貨幣のデザインの中に出てくるのは、昭和20年の5銭錫貨が最初であり、この錫貨は直径17ミリで、次に出てくる5円黄銅貨には、裏の10ミリばかりの内円の中に描かれているので、鳩が小さくなり、あまり面白みが感じられない。鳩は明らかに平和の象徴として採られたものであり、平和日本は国民あげての課題であり理想であったが、当時の貨幣の鳩を見ると、申し訳的に取り込んだと考えられる程、小さく、みすぼらしかった。

【魚】 魚は、大型50銭黄銅貨の裏に唯一回出てくるだけである。これによって海国日本の水産業の復興を謳ったものであろうが、貨面の左右両端に小さな魚が見えるという程度の＜対の小魚＞に過ぎなかった。それにしても貨幣に魚があしらわれたのは、明治以来初めてのことであった。

(c) 器 材

	昭和前期	昭和後期	昭和後期貨幣（発行年度）
ツルハシ	0	1	●大型50銭黄銅貨 (21)
鋏	0	1	●大型50銭黄銅貨 (21)
歯車	0	2	●大型50銭黄銅貨 (21) ○有孔5円黄銅貨 (24～)
火焰容器	0	1	○東京オリンピック100円銀貨 (39)
聖火トーチ	0	1	○札幌冬季オリンピック100円白銅貨(47)
勾玉	1	0	
八稜鏡	3	1	●鳳凰百円銀貨 (32～33)

件数が少ないので、比較しても興味がないであろうが、昭和前期に見られる勾玉も八稜鏡も、神話的・非実用的なものであった。これに対し、昭和21年発行の大型50銭黄銅貨の裏に見られるツルハシ・鋏・歯車などは実用的なものばかりであり、これ等は生産につながっていた。（この貨幣については「稲・麦」の節を参照のこと）

また、八稜鏡は八稜鏡そのものではなく、八稜鏡の形であって、昭和前期のカラス1銭の場合は、銘価「一銭」を八稜鏡の形で囲み、昭和後期の鳳凰百円銀貨の場合は、この形で旭日を囲んでいた。

昭和前期に「勾玉 1」とあるのは、昭和8年発行の5銭ニッケル貨の裏の中央の円孔の周囲が8個の勾玉で囲まれていたことを指している。

しかるに、終戦後には勾玉は全くその姿を隠し、八稜鏡にしても、百円銀貨の裏のデザインでは、桜の枝が八稜鏡の形を構成していたのであって、この場合も鏡ではない。

旭日は丸いので、丸を円で囲む単調さを避けようとする、自ら八稜鏡の形で包むことが考えられるのであろう。従って、厳密にいうならこの八稜鏡は器材ではなく、形態である。

火焰容器、聖火トーチは記念貨幣に見えるもので、之はやや特殊なものである。

(d) 建 築 物

なお、昭和前期には全く見られず、終戦後に貨幣面に現われてきたものに建築物があり、

- 無孔 5 円黄銅貨 (23~24)……国会議事堂
- 10円銅貨 (26~)……宇治平等院鳳凰堂

これ等の発行年代から考えてみると、前者は単なる建物としてよりも、民主々義の殿堂又は民主々義の象徴として之を強調しているものと考えられ、後者の鳳凰堂は、やや生活に余裕のできてきた国民の注意を、わが国の貴重な民族遺産、優れた美術的建築に向けさせようとしているものであろう。

いずれにしても、昭和前期には全く見られなかった建築物が貨幣(コイン)の上に現われてきたことは、注目すべきことである。尤も、この傾向は、紙幣には神社・仏閣の形で戦前にも既に見られたのであった。

図18



無孔 5 円黄銅貨



10 円銅貨

[建築物]

(e) 自 然

		昭 和 前 期	昭 和 後 期	昭 和 後 期 貨 幣 (発行年度)
静	水	0	1	○有孔 5 円黄銅貨 (24~)
旭	日	1	1	●鳳凰百円銀貨 (32~33)
富	士	1	2	○東京オリンピック記念千円銀貨 (39) ○日本万国博覧会記念百円白銅貨 (45)
瑞	雲	3	0	
波	浪	4	0	
	雪	0	1	○札幌冬季オリンピック百円白銅貨(47)

昭和8年発行の10銭ニッケル貨の裏の地模様の波は、中央の白地によって遮断されているものの、左右に展開している波模様であるから、海の波を想定したものと考えられるが、その繊細な描法から見ると、波は波にしても、和日平穩の小波であろう。

だが、10銭アルミ銅貨・カラス1銭銅貨・カラス1銭アルミ貨などの表の波は、国家総動員法の公布された昭和13年の発行貨幣だけあって、これらに見られる波は、国家前途の多難を示唆するような怒濤であり逆浪であった。戦後の貨幣には、もうこのような波浪は見ることができない。

このような昭和前期の波浪と対照的なのは、昭和24年から出された有孔5円黄銅貨の表に描かれた田圃の静水であり、これは平和と豊作とを約束する恵みの水のように思われる。

瑞雲が貨幣に現われるようになったのも、日米開戦の愈々迫ってきた昭和15年の年に発行された5銭アルミ貨や、日本の敗色の濃くなった19年に発行された5銭錫貨と10銭錫貨においてであって、今日、これらのアルミ貨・錫貨などを検してみると、当時わが国において如何にこれらの軍需資材が欠乏していたかが知られる。戦後の貨幣には、もうあのような瑞雲は見られない。

旭日は日章とも言われ、これは、わが国名や国旗にも通ずるところから、明治以来、絶えず貨幣のデザインの重要素材として用いられてきたものであるが、昭和後期では出現頻度が少なくなってきた。これは、近年、祝祭日に国旗を掲揚する家の少なくなった現象に似ているものがある。明治以来の旭日のデザインを見ると、貨幣の中心に旭日を据え、それを内円で囲んで、その外周に「大日本」や銘価・記年を配しているのが一般であった。

この二重円の内円の中にデザインを納めるためには、貨幣の形を大きくするか、或は緻密な図案でも表現し易い金貨、銀貨にする外はないと思う。しかるに、最近の貨幣は小形化、卑金属化の傾向があるために、旭日を避けるのであろうか。或は陳腐さを避けているのであろうか。

富士が初めて貨幣面に現われたのは、日米開戦の昭和16年であって、1銭アルミ貨の表面のデザインの中に見られたのであった。

この1銭アルミ貨の量目は、最初0.65gであったが、最後の発行年度の18年には0.55gという未曾有の微小貨幣にされてしまった。

すなわち、昔から日本国土の象徴と考えられ、わが国民の誇としてきた富士山は、貨幣デザインの最後の切札として出された観があったが、軽いアルミ貨では甚だ冴えず、「水にも浮く」と言われ、遂に子供達の遊び物になってしまった。

記念貨幣は、一般貨幣とは多少異なるが、昭和39年東京オリンピック記念千円銀貨の表のデザインは、富士と桜花から成っており、この貨幣は今迄見られなかった大型の千円銀貨であり、品位は銀925、銅75、量目は20gであったから、そのデザインの富士山にもふさわしい、貨幣としても真に世界に誇るべきものであった。

また、昭和45年の日本万国博覧会の時にも記念貨幣が発行され、これは百円白銅貨であり、その量目は9gで、これにも富士山が採りあげられたが、今度の富士は葛飾北斎の「凱風快晴」(赤富士)をデザイン化したもので、その素晴らしい堆積感と美術的価値とを世界の人々に誇示したのであった。

要するに、昭和後期の貨幣面からは、波浪、瑞雲などのような倥傯と神助を望むようなデザインの素材が消失してしまい、太平洋戦争勃発の際、0.65gの微小貨幣に封じ込められて、その頃、一種アイロニカルにも眺められた富士が、記念貨幣に採られ、今や真に時と場所とを得たとも言われるであろう。

この期において、水が昭和前期のように<波浪>とならず、田圃の<静水>として見出されるのも、考えてみると、なかなか面白いことである。

最後に、[その他のもの]として、東京オリンピック記念貨幣と札幌オリンピック記念貨幣に

図19



富士一銭アルミ貨

東京オリンピック記念貨幣

万国博覧会記念貨幣

〔富士〕

〈五輪マーク〉が、それぞれつけられ、万国博記念貨幣の裏には、〈地球儀模様〉の見られることを附記する。

V 昭和後期貨幣の書体

通貨としての貨幣に刻まれている必須的の文字は、(1) 銘価(金額)、(2) 発行主体、(3) 記年(発行年号年次)であり、大正・昭和貨幣に関する限り、記年のある面が裏である。これ等も貨幣デザインの中に含まれているので、これについて簡単に述べてみよう。

明治以来、貨幣面の漢字は一般に楷書で記され、これは一つの慣例として昭和20年の終戦の時迄踏襲されてきた。尤も、小型50銭銀貨(大正11~昭和13)、大型50銭黄銅貨(昭21)、小型50銭黄銅貨(昭22~23)のように隷書に記されているものもあるが、之は例外と考えてもよからう。

終戦以降に発行された貨幣の表には、銘価が漢字で記されているが、それらの裏に記されている銘価は、〈銭〉〈円〉の文字を略して、みなアラビア数字のゴシック体で大きく明瞭に記されるようになった。(ローマ字で SEN 又は YEN を付けているものもある。)これは、昭和前期には見られなかったことである。尤も、5円黄銅貨の裏にだけはアラビア数字が見られない。

次に、昭和26年発行の10円銅貨から、漢字はすべてゴシック体となった。したがって、その他の貨幣も新貨幣に切り替えて発行される時、それを機として今迄の清朝体(楷書)がゴシック体に改められている。すなわち、1円アルミ貨は30年から、新5円黄銅貨は34年から、50円と100円の白銅貨は42年から、ゴシック体に改められるようになった。

なお、最近の現象としては、42年以降発行の50円白銅貨・100円白銅貨の銘価の数字が実用的な描き文字(先の扁平なロードベンで書いたような文字)となっているのが見られる。これは一般のゴシック文字とは少し違っている。

また、昭和23年発行の1円黄銅貨から、漢字の横書きの場合は、従来の右書から左書に改められた。さらに、明治以降〈大日本〉と記されてきた貨幣の発行主体は、終戦直後、〈日本政府〉に改められ、現在のように〈日本国〉とされたのは、22年発行の小型50銭黄銅貨からであった。

VI 結 語

明治時代から現在迄の我が国の貨幣のデザインを通覧し、諸外国の貨幣のそれと比較してみると、先ず気づくのは、わが国の貨幣には植物が最も頻繁に見られるに反し、人物像が全く見られないということであって、これは紙幣と異なるところである。

尤も、明治時代には龍をもって天皇の象徴と考え、龍を取り入れた多くの貨幣があったが、現象的には龍は龍であって人物像ではない。

これは〈恐れ多い〉という観念から避けたことは、紙幣に天皇像の見られないことによっても知られるであろう。では、紙幣に取り入れたような人物を、何故、貨幣に避けたかということが問題になる。要するに、日本の国民性に順応して、無難な方向を選んだものと思われる。

昭和時代の貨幣のデザインを見ると、為政者が、その時代に何に最も関心を持ち、之によって一般国民を如何なる方面に馴致して行こうとしていたか、或は国民一般の世論を如何に忖度して、如何なる心的態度で臨もうとしていたかなどということが知られ、その時代にそれらの貨幣のデザインが、半ば無関心に看過されたとしても、そこに採り上げられた素材の取り扱い方の変遷と考え合わせることによって、その全体における意味や、その時代相を端的に理解することができると思う。即ち、貨幣のデザインは、そのための有力な資料であり、テキストである。

例えば、大正天皇御即位大礼の行なわれた翌年の大正5年発行の桐一銭銅貨を見ると、中央に据えられた〈桐紋〉の左右に〈対の小桜〉が見られるに反し、国家総動員法の公布された昭和13年に発行された10銭アルミ銅貨では、今度は〈芯なし桜〉が大きく中央に据えられ、〈桐紋〉がこの左右に〈対の小桐紋〉として扱われている。

これは、素材の点から見ると、どちらの貨幣も桐と桜を抱えているので、同じようにも思われようが、それぞれの時点における意味は非常に異なっている。

問題は、それらの貨幣のデザインが真に何を意味しているかということである。このように考えてくると、貨幣は物の交換を媒介する要具であるとともに、或る時代の為政者(又は当局者)の時代意識と、当代文化の実相を反映している鏡のようなものである。

ただ、これらの貨幣の意味する処は、そのデザインだけではなく、その貨幣の材質——わが国では金属材料——と併せて考究されなければならないと思われるが、今回は貨幣のデザインの素材の考察を主とし、後者については他の機会に触れようと之を割愛した次第である。

(昭和49.9.25)

〔附記〕 ◎本稿における貨幣の称呼は、一般に行なわれている『日本貨幣型録』(昭和49年版・日本貨幣商協同組合刊行)に用いられている名称に従った。

本稿は貨幣面のデザインを、その構成要素によって分類したため、その都度、その貨幣図を挿入しては、重複するので省略した所もあるが、所要の貨幣は他の関係個所に一回は掲載し、昭和期の殆んど全部の貨幣を載録するように努めた。

ただ、現在通用している貨幣については、読者から出来るだけ現品に接していただくために、故意に掲載しなかった貨幣もある。

〔注1〕 ○なお、GHQの指示によって、紙幣にあっては、日本武尊・武内宿禰・藤原鎌足・和気清麻呂・坂上田村麻呂・菅原道真・楠木正成の銅像・八紘一字の塔なども軍国主義的なものとして、これを図案に入れることが見合わされ、聖徳太子の肖像だけが追放を免れた。(創元社刊、三島四郎・作道洋太郎編『貨幣』154頁参照)

〔注2〕 ○この前年の昭和31年には、テレビが全国に普及し、一億総白痴化と言われる程、ゴールデンアワーの番組に魅せられた時であり、競馬ブーム・登山ブーム・電化ブームの年であり、更にこの百円銀貨の出た年はデパートブーム・団地ブーム・カリブソ・スタイルブーム・石原裕次郎ブーム・ロマンスグレー・ブームとなっており、特に注意すべきは、この年の天皇誕生日を期して新東宝の映画〈明治天皇と日露戦争〉が封切され、戦後映画史上の最高の当たり作となり、毒舌家として有名な大宅壮一をして、「泣かない僕がなぜ泣いたか」(図書新聞32年5月18日)を書かせた。すなわち、昭和32年は、このような太平な年であった。(筑摩書房刊、『日本の百年』の第一巻「新しい開国」編の〈過去十年ブーム一覧表〉230頁参照)

☒ 本論文の用語に関しては、デザイン専攻の小町谷助教の御教示を賜った。なお、戦時発行のアルミ貨の量目確認のため服飾美術科の研究助手岩船さんに微量測定をして貰った処、昭和18年発行の5銭アルミ貨と菊10銭アルミ貨の量目が17年発行のものと異なっていることが発見された。即ち、5銭アルミ貨の17年発行のものは1g、菊10銭アルミ貨の17年発行のものは1.2gとなっているのに、18年発行の両者の幾つかを測定した結果は次のようである。

発行年度	5 銭アルミ貨	菊10銭アルミ貨
昭和 17 年	1.0007 g	1.2085 g
昭和 18 年	A	0.7944 g
	B	0.8037 g
	C	0.8142 g
	D	0.7918 g
	E	1.0021 g

一般に、18年発行の5銭アルミ貨は、17年発行のものと同様に1グラム、18年発行の菊10銭アルミ貨は17年発行のものと同様に1.2グラムだと思われてきたものである。ところが、18年発行の数個によって測定してみた処が、5銭アルミ貨も菊10銭アルミ貨も、18年に至って、それぞれ0.2グラムの量目を落とされていることが発見された。これは当時、わが国において航空機製造資材として、アルミニウムの必要がいに急を要していたか、或は外地から入手の道が全く断たれていたことなどを推定する上において有力な手がかりとなるものである。この発見は、岩船研究助手の援助のお蔭であるとともに、また、本校の精密測定機のお蔭でもあった。

ここに、改めて服飾美術科の先生方の御厚意にお礼を申し上げるものである。

- ☒ 明治・大正・昭和貨幣における桜花と国民思想や戦争との関係等については、次のような論文にして発表してある。

○ 貨幣にみる桜花の紋様……『日本及日本人』昭和50年新春号（通巻1527号）